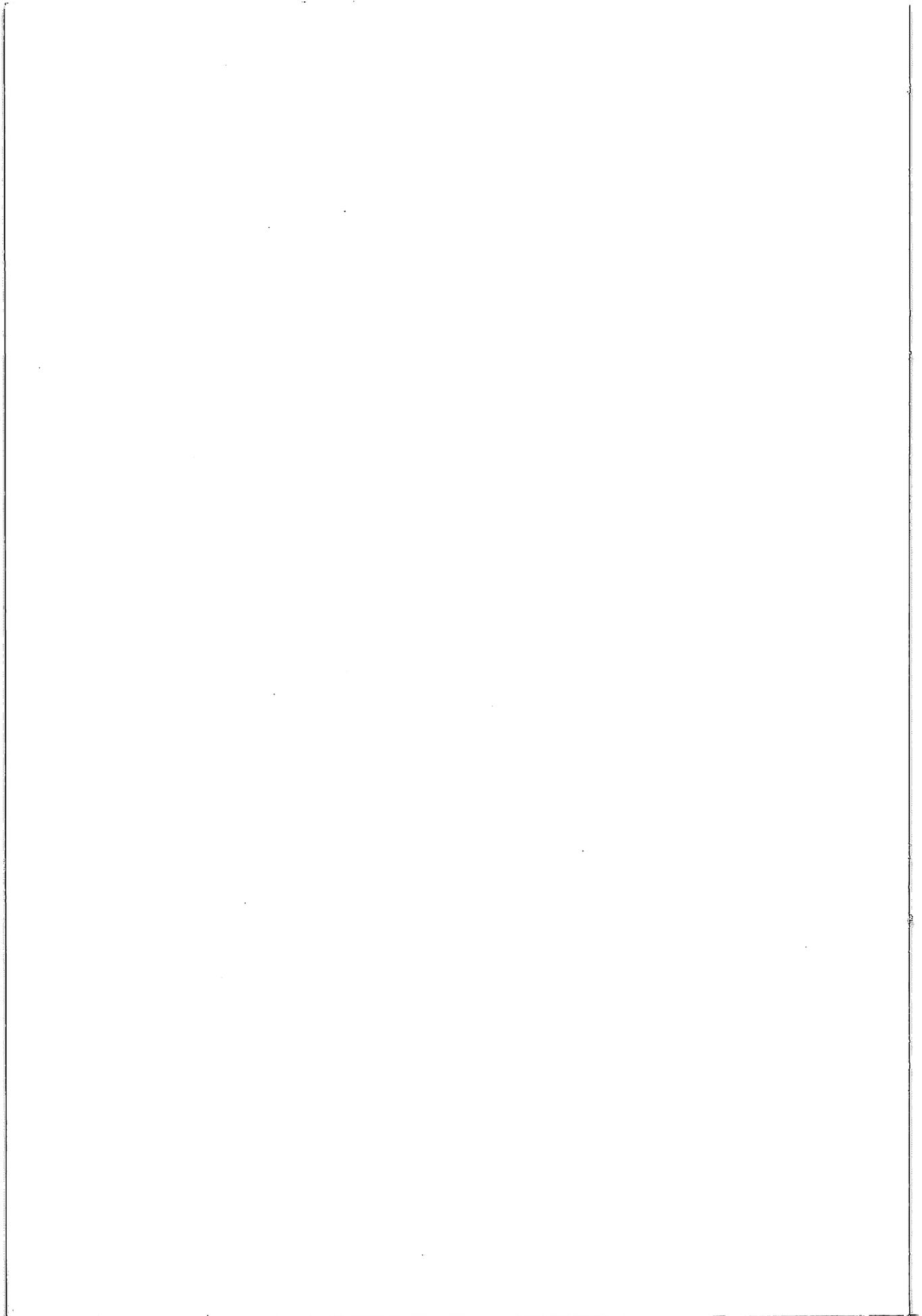


新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

第3分冊 フレペツ遺跡群Ⅱ

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





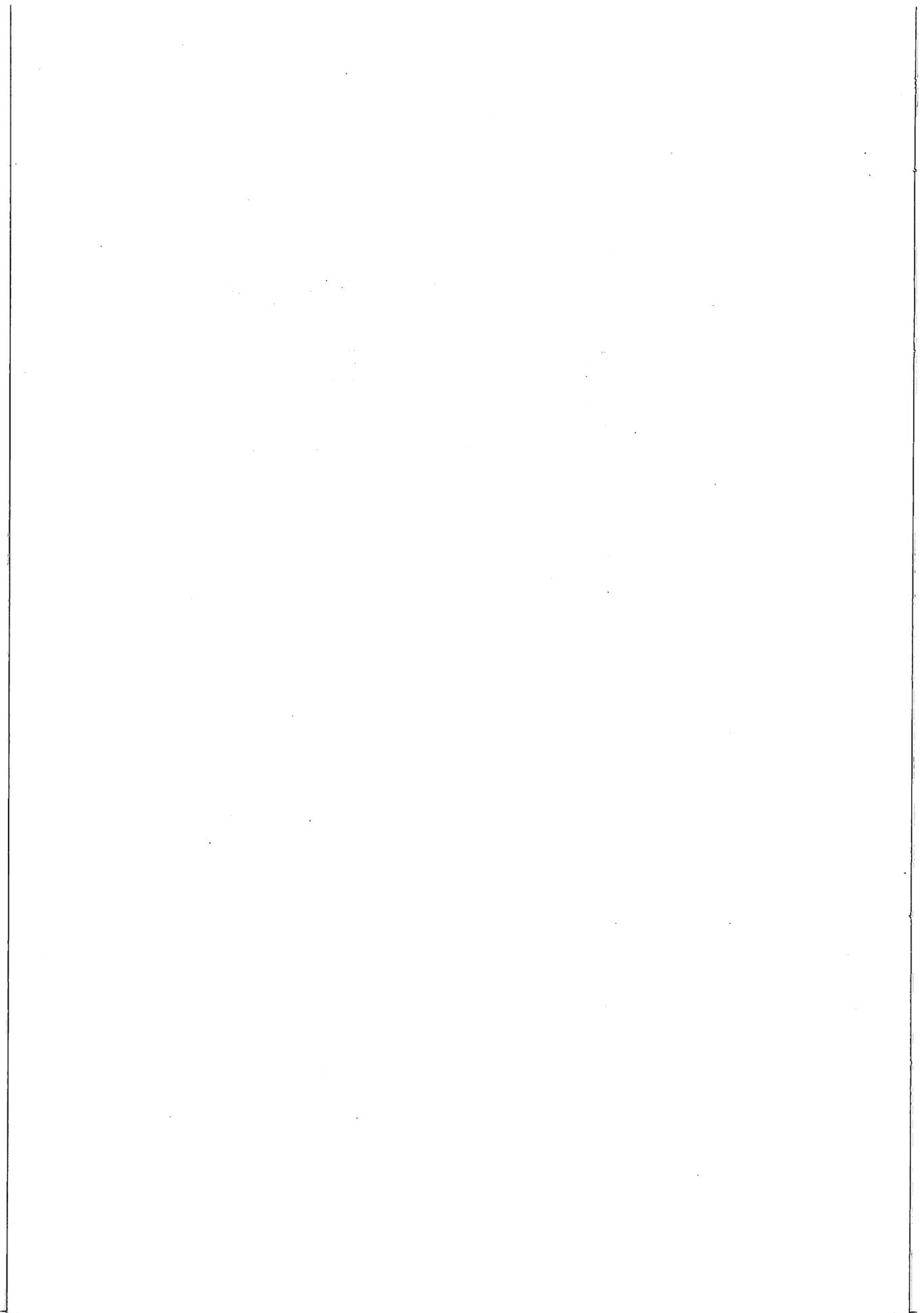


新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

第3分冊 フレペツ遺跡群Ⅱ

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



目 次

目次	
美沢5遺跡の調査	3
1. 概要	3
2. 遺構と遺物	4
(1) 遺構	4
(2) 遺物	6
1) 土器	6
2) 石器等	6
引用参考文献	8
写真図版	11

挿 図 目 次

図1 調査地区と周辺の地形	2
図2 昭和54年度調査時の地形と調査地区	3
図3 遺構位置図とT-1	5
図4 遺物と遺物分布	7

表 目 次

表1 遺物一覧	4
表2 掲載拓影土器一覧	7
表3 掲載石器一覧	7

図 版 目 次

図版1 調査風景	11
① 遠景（南東から）	② 近景（北から）
図版2 調査後の風景	12
① T-1（北から）	② 調査後の風景（南から）
図版3 包含層の遺物	13
① 土器	② 石器等

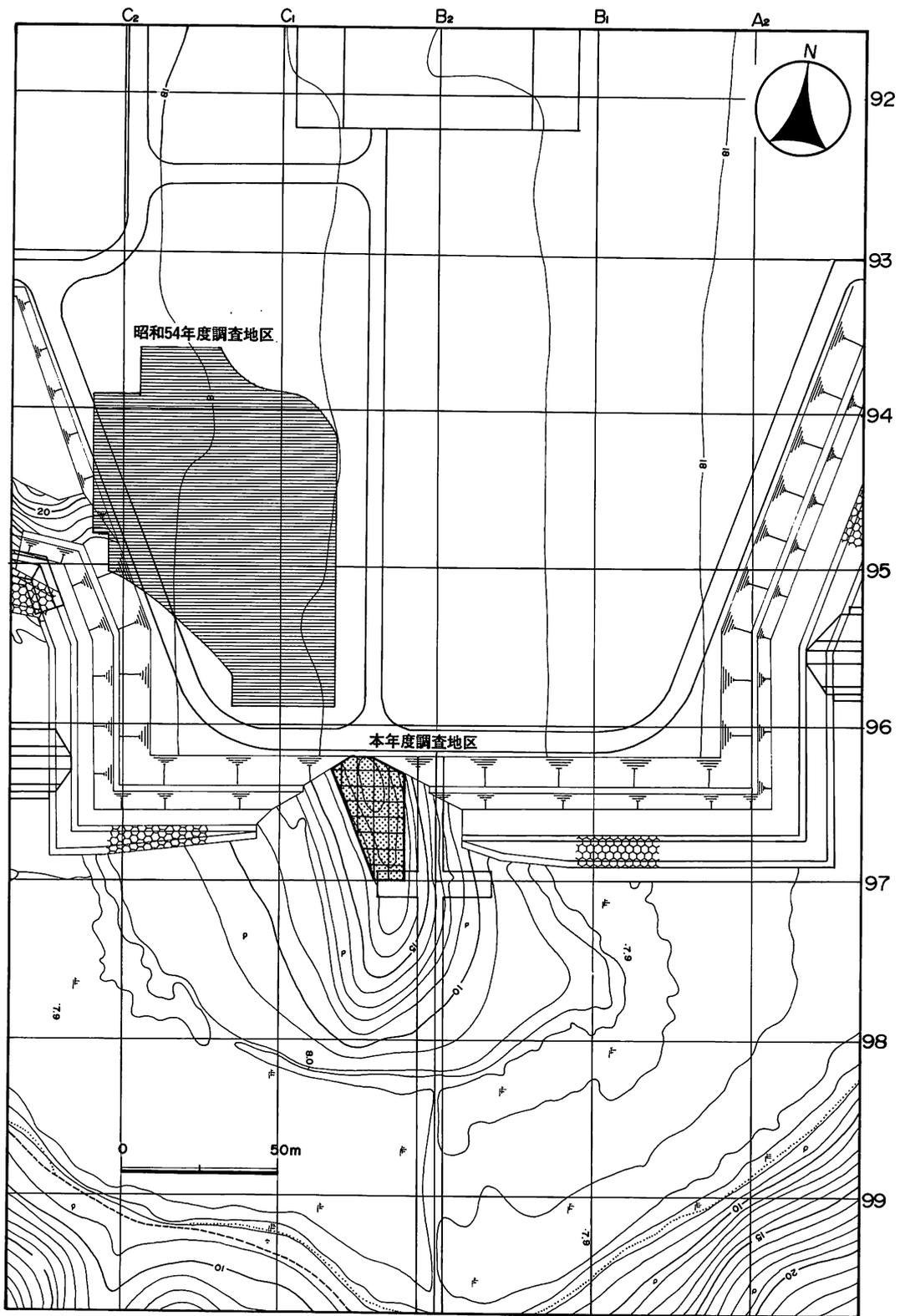


図1 調査地区と周辺の地形

美沢 5 遺跡の調査

1. 概要

美沢 5 遺跡は、用地南端のフレベツ湿原に突き出した舌状台地にある (図 2)。今年度は工事工程の都合からわずかに残されていたこの舌状台地の先端部分を調査した (図 1)。今回の

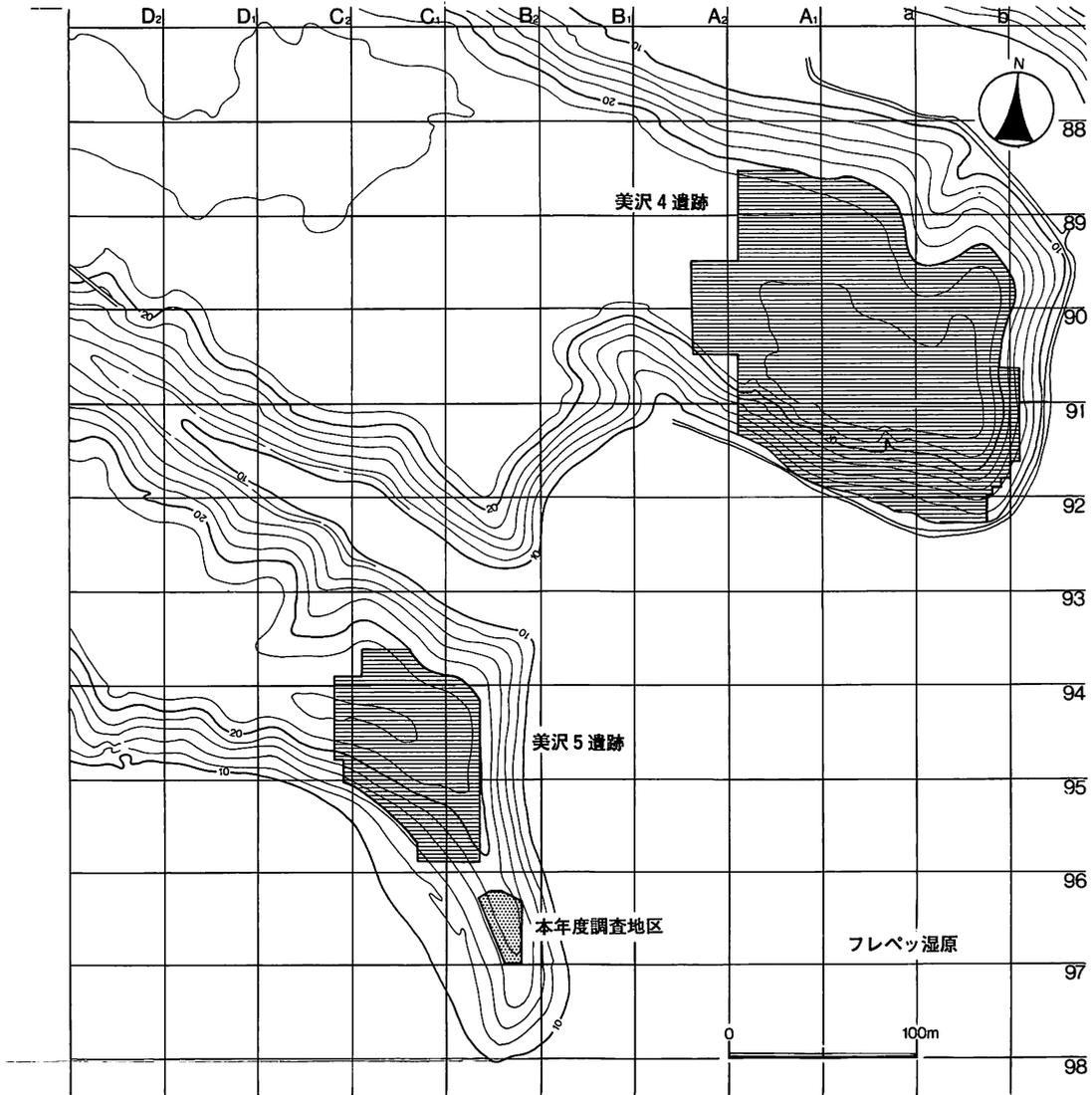


図 2 昭和54年度調査時の地形と調査地区

調査区の後背地は昭和54年度に調査されている（フレペツ遺跡群 昭和54年度 道埋文）。

調査区内は、東西の斜面が急傾斜で、南へ緩やかに下る地形となっており、横断面が馬の背のような形をしている。層順は前掲のとおり（第1分冊Ⅰ-4-(2)、図4）であるが、美沢川流域の堆積状態と比べ、Ta-b層とTa-d₂層が厚い点が異なっている。調査の対象層はⅡ黒層で、調査面積は660m²である。

Ⅱ黒層の堆積状態は、横断面形の頂上付近が5～10cmと薄く、東西の斜面下部は40～50cmと厚い。しかも頂上付近にはTa-c層直下にTa-d₂層がみられる部分もあった。遺構、遺物は少なく、Tピット1個と土器、石器等162点が検出されたのみである。

Tピットは、調査区のはぼ中央、丘陵の頂上にあり、標高17.6mのコンターが回り込む位置に作られている。形状は溝状の細長いものである。

検出された遺物の内訳は土器片151点、石器等11点である。土器片はすべて縄文時代後期初頭に位置付けられる同一個体のもので、1点を除き、1か所からまとまって出土した。石器等の多くは東西の急斜面下部から検出されている。石器はつまみ付ナイフ1点、石斧片2点だけで、他は剥片および礫片である。

表1 遺物一覧

	分類	包含層	範囲確認調査	合計	
土器	Ⅳa	151		151	
	0	01	4	4	
石器等		02	1	1	
	Ⅲ	D	1	1	
	Ⅳ	F	1	1	
	X	0	1		1
		1	1	1	2
合計		160	2	162	

2. 遺構と遺物

(1) 遺構

前述のごとく、Tピット1個のみが検出された。溝状の細長いタイプで、台地の最先端に作られたものである。

Tピットは昭和54年度の調査でも20個検出されており、平坦面、斜面にかかわらず分布している。形状は長円形のもの、小型で隅丸方形のもの、溝状の細長いものの3タイプがある。このうち、溝状の細長いタイプは3個ある。1個は平坦面に、他の2個は台地の縁に分布しており、いずれも長軸がコンターと平行に作られている。しかし、今回検出されたTピットを含めても分布に企画性は認められない。

T-1 (図3)

横断面形は、上部の崩落によってY字形を呈しており、西側壁には大きく崩落している部分が認められる。覆土は14層に分化できる。色調および混在状態は別記のとおりで、4層以下は崩落によると思われる堆積状態である。

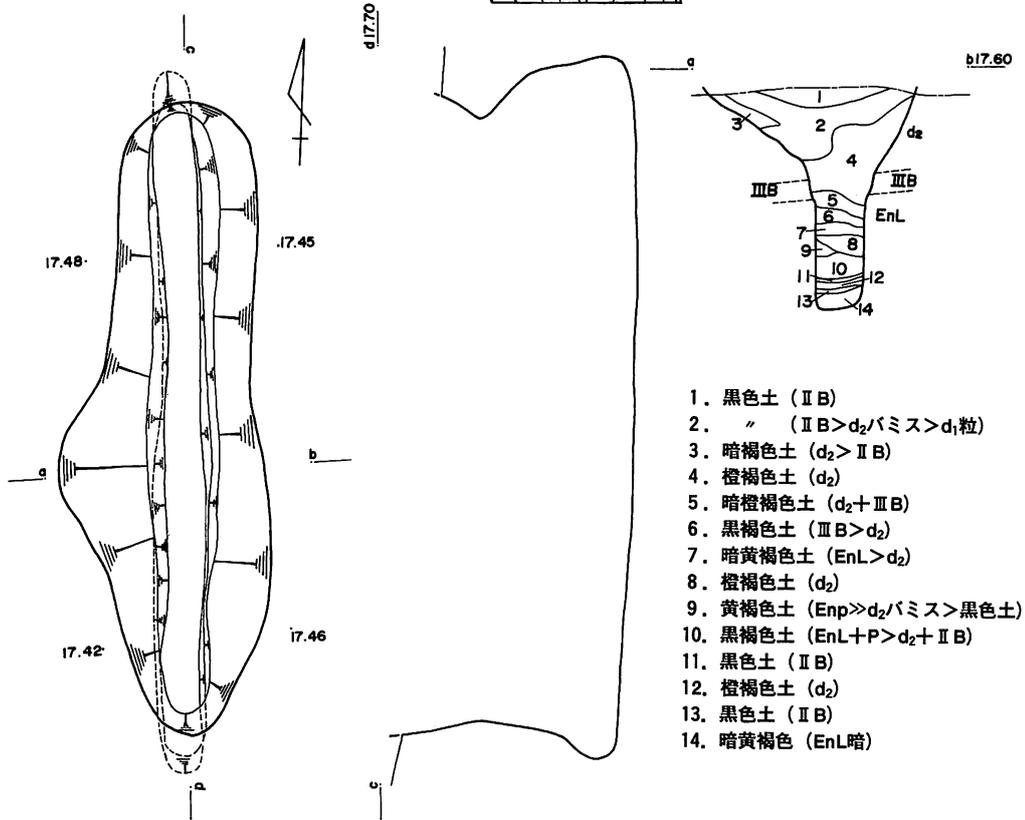
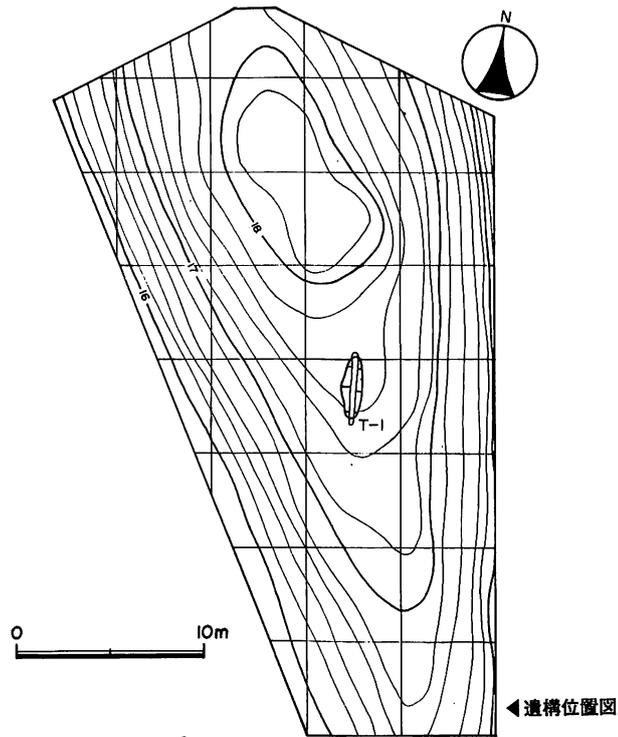


図3 遺構位置図とT-1

位置 B₂-96-35・36 平面形 溝状の細長い形状
規模 3.39×1.09/3.73×0.22/1.99 長軸方向 N-7°-W

(2) 遺物

1) 土器 (図4-1~7)

151点出土した。いずれも後期初頭に位置付けられる同一個体の破片である。分布は図に示すとおり限られており、1点を除き丘陵の頂上からまとまって検出された。

これらは深鉢の破片であるが、器形を復元できるまでにはいたらなかった。胎土は、砂礫を多く含む。焼成は比較的良好、器面の色調は明黄褐色~明褐色を呈している。しかし、風化が著しく進んでおり、器面が剥落しているものがほとんどである。

口縁部の破片は1点(1)だけである。口唇は平坦で体部にはRLの斜行縄文が施されている。この斜行縄文は、胴部にも間断なく施文されている。2・3には、二ないし三条の沈線が認められ、この土器には胴部上半の地文の上に曲線による文様が描かれていることが判明したが、全体の文様構成を把握することはできなかった。

今回得られた資料は、用地内の調査結果をみても非常に類例が少なく、美沢1遺跡などで断片的にみられる^(註1)だけだが、余市式土器と共伴する土器群であろうということであり、^(註2)道央部においても本州からの影響を受けた土器群が使われていたことを示唆している。また、前回の調査で検出された土器は、縄文早~前期に限られており、特に前期の静内中野式土器群(Ⅱ群a-2類)が主体を占めている。しかし、今回の調査ではこれらが全くなく、逆に前回出土していない後期初頭の土器が一個体だけ検出された点は、本遺跡における人間の行動を考える上で非常に興味深い。

(註1) 美沢川流域の遺跡群Ⅱ 昭和52年度 道教委の美沢1遺跡出土資料(図192-284)

に同様の沈線が描かれている。しかし、今回の資料に比べ若干厚手の土器片である。

(註2) 大沼忠春氏の教示による。

2) 石器等 (図4-8~13)

11点出土した。このうち2点は道教委が行った範囲確認調査の際に検出されたものである。分布は図に示すとおり散漫である。石器はつまみ付ナイフと石斧片だけで、他は剥片・礫片である。以下図示したものについて記述する。

剥片(8~10) 8・9は黒曜石、10は頁岩の剥片である。

つまみ付ナイフ(11) 幅広のつまみ部をもつ片面加工のものである。珪岩の厚めの剥片を素材としており、背面は側縁にのみ入念な2次加工が施されている。また、腹面はつまみ部だけが加工されている。

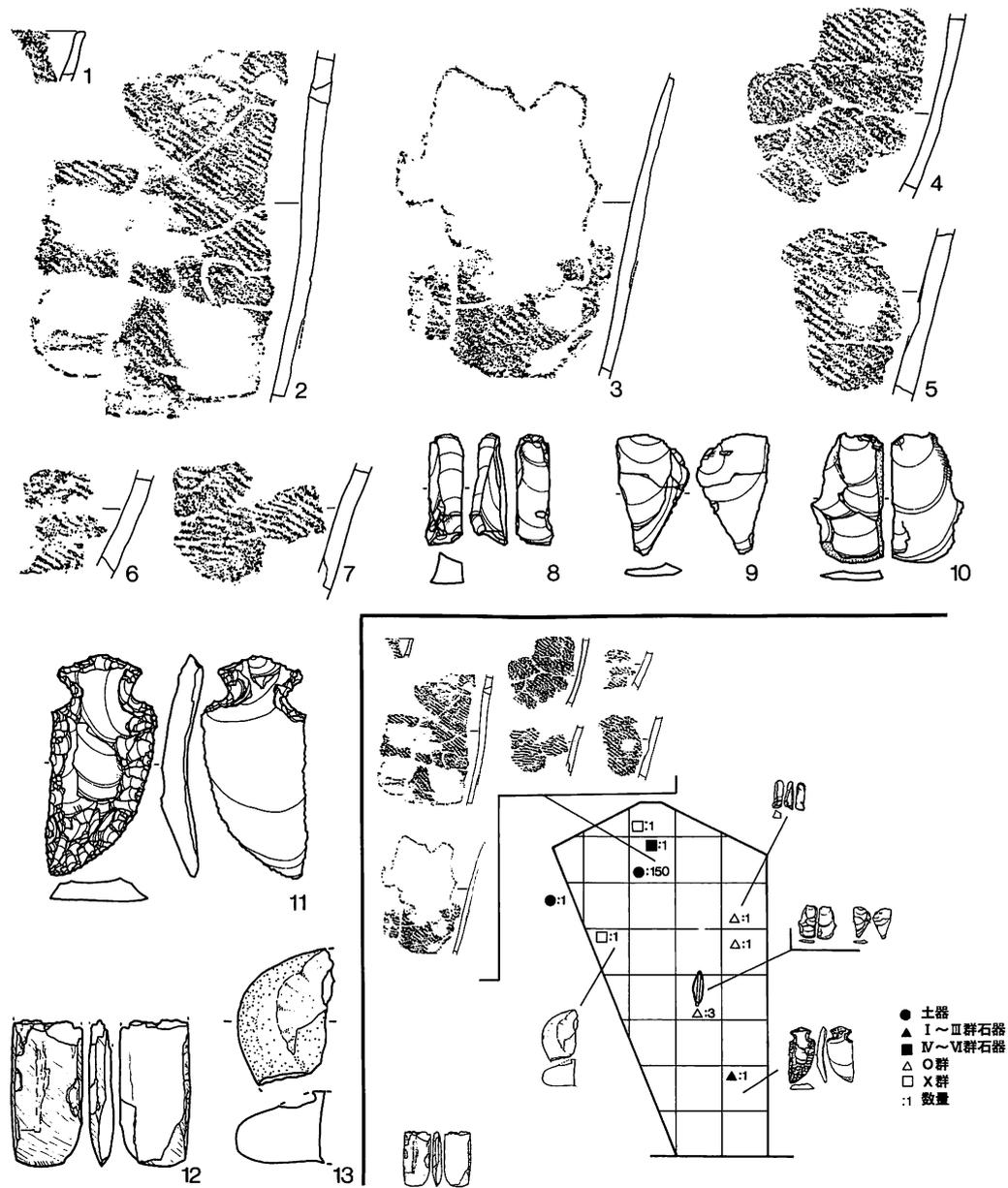


図4 遺物と遺物分布

表2 掲載拓影土器一覧

番号	分類	部位	発掘区	写真版番号
1	IVa	口	B ₂ -96	3-①
2	"	胴	"	"
3	"	"	"	"
4	"	"	"	"
5	"	"	"	"
6	"	"	"	"
7	"	"	"	"

表3 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質	写真版番号
8	フレイク	01	B ₂ -96-24	3.0×1.0×0.8	2.8	Obs.	3-②
9	"	"	B ₂ -96-36	3.2×1.9×0.4	2.3	Obs.	"
10	"	"	"	3.5×1.9×0.3	2.0	Sh.	"
11	つまみ付きナイフ	D	B ₂ -96-28	6.1×2.8×0.8	14.2	Che.	"
12	石斧	F ₂ 片	範囲確認調査	(5.9)×2.9×(0.9)	(26.0)	Sch.	"
13	礫	X1	B ₂ -96-55	(4.7)×(3.4)×3.0	(75.7)	And.	"

石斧 (12) 片岩製の頭部を欠く石斧片。刃部には縦方向に使用痕が認められる。また腹面の側縁には整形の際の剥離が残されている。

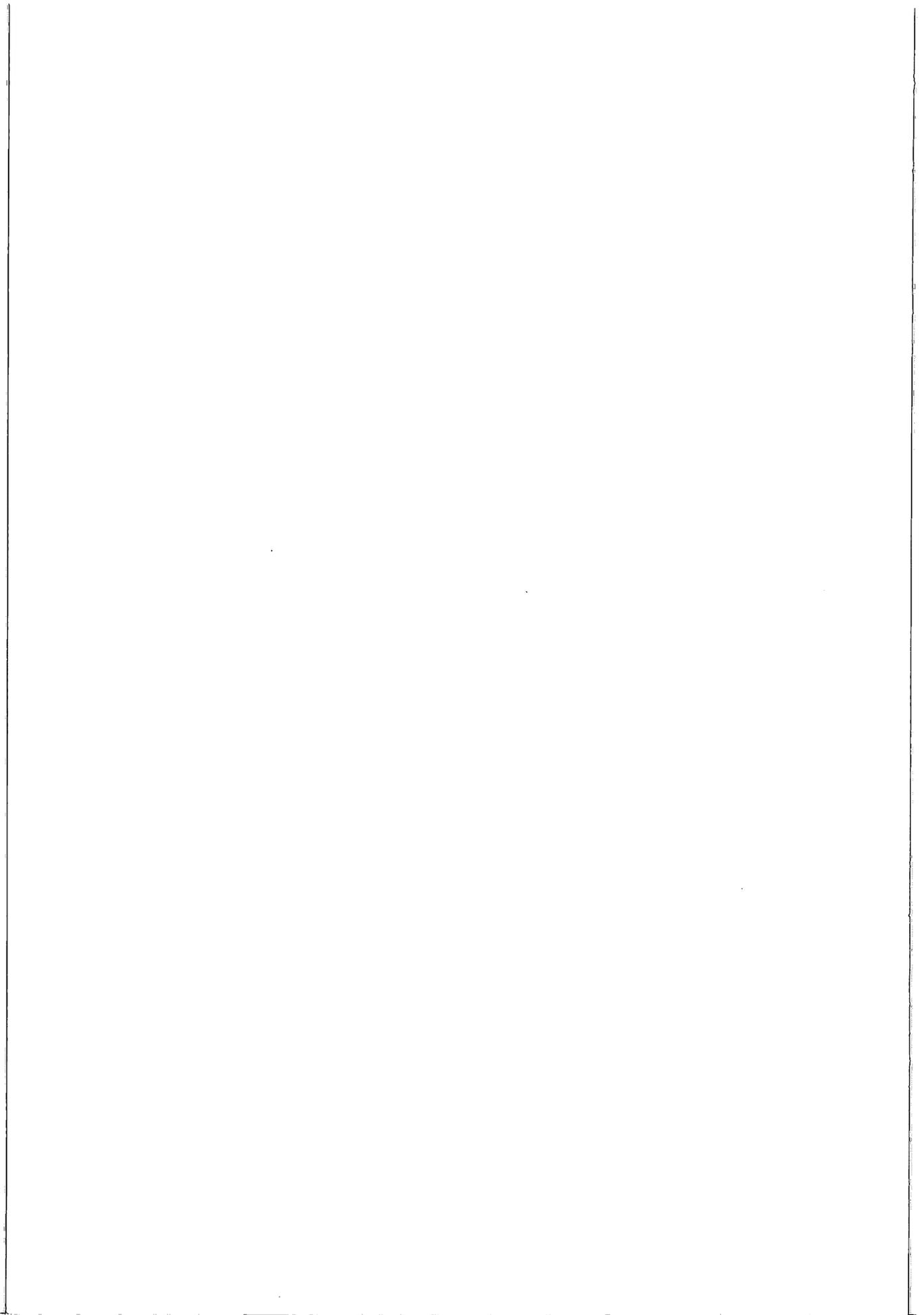
礫片 (13) 安山岩の円礫片で、わずかに焼けている。

引用参考文献 (出典順)

(財)北海道埋蔵文化財センター 1979 『フレベツ遺跡群』

北海道教育委員会 1977 『美沢川流域の遺跡群』Ⅱ

写真図版





△① 遠景 (南東から)

調査風景

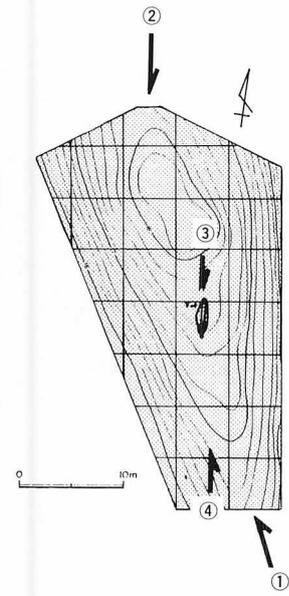


△② 近景 (北から)

図版 2



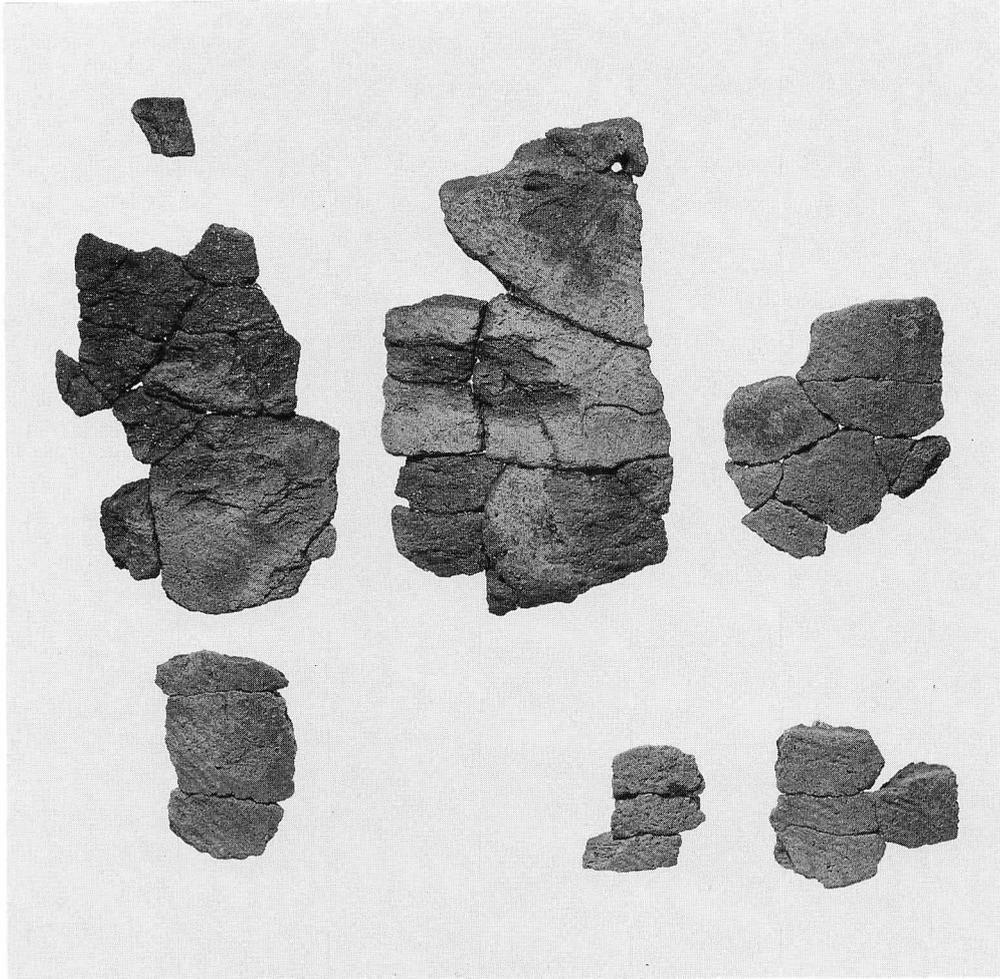
◁③T-1 (北から)



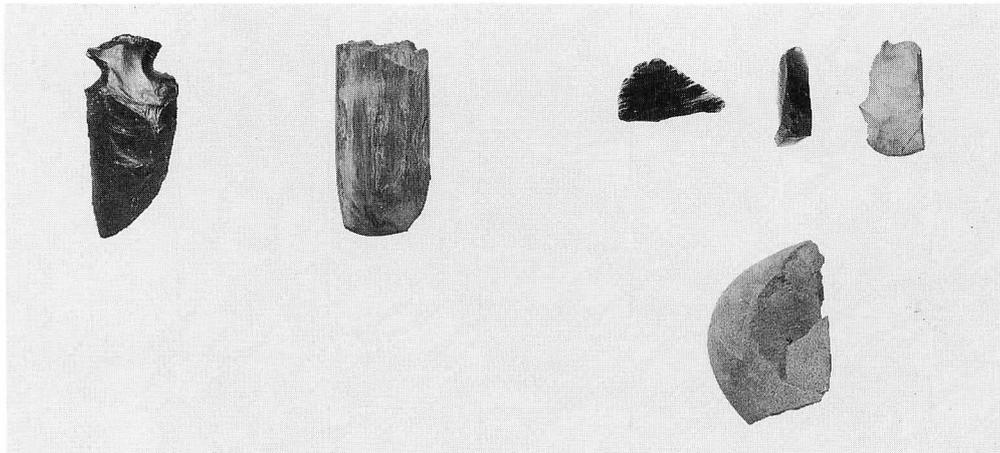
▽④調査後の風景 (南から)



調査後の風景

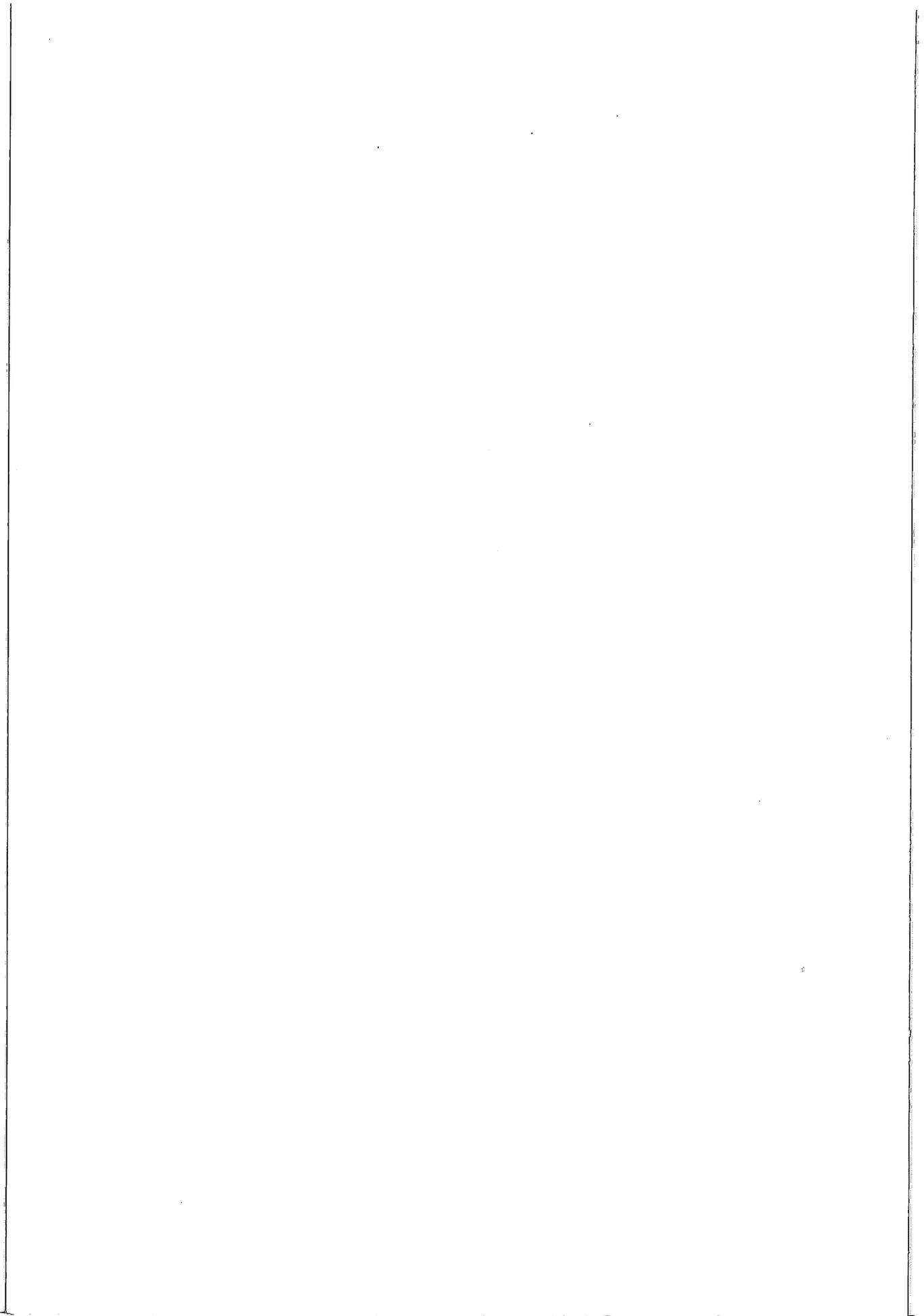


△⑤土器



包含層の遺物

△⑥石器等



(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告 第35集
新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
第3分冊 フレペツ遺跡群Ⅱ

発行日 昭和62年3月26日

発行者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒 064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561-3131

印刷者 富士プリント株式会社

〒 064 札幌市中央区南16条西9丁目

Tel (011)531-4711

